

『豊かな教育を考える会』シンポジウム

～目の前の子どもがすこやかに育つために

今わたしたちができること～

- 日時 2024年11月10日(日)
13:00～15:30
- 会場 横浜国立大学
常盤台キャンパス
- シンポジスト
 - ◇ 横田 宗一郎
元厚木市立南毛利小学校長
 - ◇ 谷川 知栄子
横浜市立日枝小学校主幹教諭
 - ◇ 新田 涉世
川崎新田ボクシングジム会長
 - ◇ 原田 悠妃
横浜国立大学教育学部 4年
 - ◇ 庄子 甲子(コーディネーター)
友松会研修部長
- 内容

私たちは、常に「すこやかな子ども」が育つように心から願っている。しかし、現実的には、学校での長時間労働や子どもたち・保護者への個別対応の複雑化など、学校教育が抱える課題の解決が見通せていない。これまでに目の前の子どもたちと関わった様々な場面で、子どもたちから教えられたり学んだりした経験を通して、自己の人間的な成長や喜びを振り返り、教職の魅力や豊かさを共有する機会にしていきたい。

現代社会の様々な課題(例:子どもの不登校、発達にかたよりのある子どもとの関わり、子どもの学力格差等)を踏まえ、子どもの成長に関わる教員をはじめ、すべての人が子どもと向き合い共に成長していくという姿勢を見せることがいかに子どもたちにとって大切なことなのかを考えていくことが必要と思われる。そこで「目の前の子どもがすこやかに育つために 今わたしたちができること」をテーマとして設定した。目の前の子どもがすこやかに育っている具体的な実践や課題を聞き、自分事として子どもとの関わりを一緒に考えたり自分の経験を話したりすることにより、私たち(自分)ができることを考えることを通して「豊かな教育を考える」ことにつなげていきたい。

次第

開会のことば(小池 弘子 副会長)
友松会会長あいさつ(小島 勝 氏)

日頃より友松会に対してご支援やご協力をいただき心より感謝申し上げます。

本日、教文ホールの前に皆さんや大学の後援会のご支援で、『みはるかす』の歌碑が落成しました。その歌詞に♪みはるかす青海原



に…緑濃き丘に登りて♪とあります。学生の皆さんは、どこの丘、どこの海を見ているのかご存じですか。私は清水ヶ丘世代でしたので、清水ヶ丘から見える、本牧や根岸の東京湾と思っていました。3年前プラウド卒業生で表彰された作詞者の鶴若さんと作曲者の大根田さんのお二人から、当時通われていた学芸学部(現在の附属横浜小)は立野にあり、丘とは立野の丘、海は立野から見た海だと、その時初めてお聞きしました。

さて、本日の会ですが、2年間にわたり研修部が中心となり計画、準備しました。先ほどご覧いただいたスライドも150周年を記念して大変苦勞して作ったようです。皆さんで教育学部150年の歴史をたどっていただけたならと思います。

最後に、この「豊かな教育を考える会」を友松会としても、もっと皆様にとって「ああ、来年も来たいな、友達を誘ってみたいな」と思っただけのようなテーマ、内容にしたいと思いますので、『是非、こんな内容で』などご要望がありましたらお寄せください。

教育学部副学部長あいさつ(軍司 敦子 氏)

本校教育学部の指導方針の根底には、理論と実践の補完ということがあります。勿論、実践というのは、学校に行って児童生徒とふれあうことですが、そればかりではなく児童生徒を支える先生方・地域・保護者の皆さんなど様々な

方々とのつながりを通じて今直面している現代的な教育課題を解決していこうとする力をつけることも実践として重要な役割をもっています。そうした意味では本日の会のように様々なお立場の方が一堂に会し、いろいろな意見を述べ合うことは大変貴重な機会と捉えています。



学校現場で活躍されている先生方、地域で支えてくださる皆様方には、これから教職を目指す学生たちが抱えている不安を少しでも軽減していただいたり、教職への志を強めていただいたりできるようご支援をお願いいたします。また、学生の皆さんは、この機会を活用し、将来的には教員として「人の豊かな暮らし」を支えられるような人になってほしいと思います。

さらに、この会が終了しましても、皆様にはその実績を生かし、大学にも立ち寄っていただき、後進を励ましてもらいたいと思います。

本日はどうぞよろしくお願ひいたします。

(以後敬称略)

庄子：この豊かな教育を考える会は、その時々の教育の課題を取り上げ、会員相互の意見交換を図りながら自分なりの解決の糸口を見つけ、行動化を進めてきました。

今回は、現代社会の様々な課題を踏まえ、誰もが願う「目の前の子どもがすこやかに育つために、今わたしたちができること」をテーマに進めていこうと考えています。

シンポジストの皆様は、その経験から「すこやかに育つ」事例や考え・課題を伺い、そこから私たちが自分事として子どもとの関わりを見つめ直し、今できることを見つけていきたいと思ひます。

まず横田さん、現役時代を振り返り、改めて感じることをお聞かせください。

横田：令和2年に定年退職し、改めて感じていることは「学校は楽しいところだ」ということです。

子ども一人ひとりの成長の瞬間に立ち会えるという、子どもたちがどんな未来を創造してく

れるのかなということに思いを馳せると毎日が刺激的だなと思ひています。

学校は本当に素晴らしいところだと思ひますので、今日はそのことをお伝えできればと思ひます。

庄子：現役教師の谷川さん、今何をされ、何を大切にされているかをお聞かせください。

谷川：今一番大切にしていることは、個性的で自由でまだまだ自分中心の子どもたちですが、自分たちの思いを出し合っ、お互いに認め合ったり他者を受け入れたり、自分の成長を感じたりすることができるクラスづくりを目指しています。

そのために、子どもたちが面白いと思える授業を展開するにはどうしたらいいのかがいつも悩んでいます。また、一人ひとりが何を考えて、授業でどう生かしてあげたらいいか、自己肯定感をどうもたせたらいいかを考えています。

子どもたちが輝くことを目指して日々取り組んでいます。

庄子：第32代東洋太平洋バンタム級チャンピオンになられた経験をお持ちになり、多摩支部長、そして地域に密着しながらボクシングを通じた人間教育を実践されている新田さん、その思いをお聞かせください。

新田：引退した後、自らボクシングジムを開設し、地域の子もたちがボクシングを通じて成長して欲しいという思いで、「ボクシングを通じての人間教育」を理念に掲げて活動しています。チャンピオン育成もそうですが、ボクシングを通じて人を育てることが大切だと思ひています。

庄子：現役学生の新田さん、現在どのような学生生活を送られていますか。

原田：来年4月から教員になる予定です。よろしくお願ひします。

ゼミは理科教育、学校ボランティアで2校に行っています。あとは、サークル活動、バイトといった生活を送っています。

庄子：原田さん、学校ボランティアや教育実習などを体験して、子どもがすこやかに育っていると感じた場面をお聞かせください。

原田：学校ボランティアや教育実習での子ども様子を紹介します。

運動会で、集中力が続かないとか、人との関わりの中で苦手意識を感じているのかなという児童が、みんなでやれば乗り越えられるという体験によってすこやかに育っていることを感じました。

また、図工でボンドやのりを使う学習で、ちょっとしたことから活動に取り組みなくなってしまった児童に対して、インクルーシブ教育で言われていますが、その時に周りの児童が優しく「がんばってるじゃん」とポジティブな言葉かけをしていました。これは教えられてできることではなく、育ちを感じました。

小学校2年生の国語スピーチの授業では、話し手の話もとても大事だと思いますが、聞き手の態度もよく、頷いたりして話し手が話したくなるような態度でした。先生に授業の後でお話を聞いたなら、子どもたちがここまでできると思わなかったと言っていたので、雰囲気づくりは先生だけが行うものではなくて、先生自身も育てられていると感じました。

庄子：図工で、取り組めない子どもにはどのような声かけをしながら進んでいったのですか。

原田：私自身の声かけは、何によってできなかったのかを探るために、真横で付き添って「なに？困っているの？」というふうにしました。



ただ、周りの子どもたちの声かけとしては、実際に困っているところにアプローチするのではなく、

頑張っているところを認めてあげて、さらに「これやってみようよ」という具体的な取組につながるような声かけをされているのを見ました。

庄子：運動会ではみんなでやればできることはどんなことでしょうか。

原田：ダンスだったので、振り付けをそろえること、楽しそうに踊るということを授業の中で先生方が働きかけていったのだと思います。

庄子：谷川さん、子どもたちがすこやかに育っていると感じている様子を教えてください。

谷川：子どもの、大人では考えつかなかった言葉とか行動に、先生って素敵な仕事だなと思

うことがたくさんあります。

すこやかに育っている様子をお話しします。

3年生国語の教材がきっかけでコマを回す活動を子どもたちがやりたいと言い始めます。最初は牛乳パックに色をつけて回して「きれいだね」と言っていました。大人から見ると、これが楽しいのかというくらいのコマでした。しかし、地域の方が「老人会に持ってきて一緒に交流しませんか」と声をかけてくださり、子どもたちが出かけて行き、そこで楽しい交流がありました。

次に子どもたちは街に出かけて行って「交流できる場所はありますか」と声をかけるようになりました。そうしたら、声をかけてもらえてコマのショーをやるようになりました。

その後の地域交流では、名前や好きな食べ物を聞いて仲良くなろうとか笑顔になっているか確かめてみようとか目標をもつようになりました。さらに、コマを回したことのないお年寄りには、自分たちが回したコマを手に乗せてあげようといったような活動に進んでいきました。

いろいろな町内会に行こう、自分たちの出身幼稚園に行ってみようといった、私の想像を超えた活動が広がっていきました。

最後の交流の後に子どもたちの振り返りシートでは「地域の人と交流するといいいことばかりで幸せです、頼れる人が増えて笑顔にできるし、交流して仲良くなれてコママスターになれた、一年を振り返るととにかくチャレンジな一年でした、楽しかったです」とあり、私は「こんなことができたみんながすごいね」と書きました。

子どもたちと一緒に活動することを通して、地域と関わって、子どもたちを育ててもらった実践になったと思っています。

子どもたちは学校だけでなく地域の人と関わって育っていくことは大きいと思います。先生はそれをコーディネートしなくてはなりません。発想を変えて、こんなこともできる、こんなこともできそうとやってみると、面白いなど思えるので、クリエイティブで素敵な仕事なんじゃないかなと思っています。

庄子：横田さん、長い教員時代を振り返った中で出会ったたくさんの「すこやかに育っている」子どもについてお聞かせください。

横田：現場から少し離れて学校を見る機会があって、最後の5年間は子どもたちの様子で心配なことが増えてきました。一番心配なのは小学校での暴力行為がすごく増えていること。いじめ・不登校も同じです。その時は校長でしたが、校長にできることには限りがあります。今度はぜひ子どもの近くにおいて仕事をしたいということで今は私立小学校で勤務しています。1年目は1・2年の学年主任。去年は3年の担任。やってみたいと思ったことは「いいとこさがし」です。子どもは相手のケチ付けたくなる所はすぐ見つかりますが、いいところはなかなか見つけられません。〇〇さんのいいところはないのと聞いても、腹が立っているからでしょうか、そういうふうに見る目は育ちにくい。大事なことだと思って、いいとこさがしをすることにしました。



具体的にはA5の紙に、同級生のいいところをその人に向けて書く。ランダムに書くと偏るので、今週は自分の周りにいる子へ、今週は同じ系のメンバーへ、行事・運動会・文化祭でがんばった子へ書くというようにテーマを与えて書いていく。直接渡すのではなくポストに入れる。たまり具合を見て係の子が配りに行く。シンプルな活動ですが、これをやっていくと、子どもはニコニコしていく。そうだったかなあと自分のよさに気がついていない子もいるが、悪い気はしない。もらったものをファイルにつづっていく。このような活動を一年間続けました。

友達の良さに気づきあって仲良くしてほしいというもあるが、子ども一人ひとりが自己肯定感、自分で「なかなかやるじゃないか」「案外私はこれでいいのかもしれない」というふうに気づき、次につながってほしい。子どもが相互にやることで、自分がこのクラスにいてもいい、自分の良さに気づいてくれる誰かがいる。クラス全員がまだつながっていないかもしれませんが、一人、二人と新しいカードが増えていくことで自分の所属感が高まっていくということをおねらってやってきました。

自信のない子の中で今度は私が役をやってみ

ようという子も現れましたし「無理、無理」と言っていた子もカードを書いた子が「一緒に頑張ろうよ」というやりとりが実際に見られました。

庄子：いいとこさがしで子どもの所属意識が高まるということで、どれくらい続けてやりましたか。

横田：学年主任をやっていた時は2クラスだったので、それぞれのクラスの先生に紹介しました。それぞれの先生も自分の学級づくりがあるので強制はできません。

自分がクラス担任の時には必ず週に1回はやるという約束で、何か気づいたことがあれば、いつでも書いてポストに入れていいのだよ、ということで最低一年間やりました。

庄子：一年間やったあと日々変わっていったと思いますが、その変容をお聞かせください。

横田：トラブルがないわけではありませんが、相手の悪口や非ばかりを言うのではなくて、自分はどうだったのかを振り返ることによって自分を冷静に見る力がついてきました。

日常の積み重ねの中で何らかのきっかけで、言い争いになったとき、あの子が全部悪い訳ではない、嘘をつくような子じゃないと、相手の良さに気づき直せる、そういう所に戻ってくる力が高くなったかなと思っています。

今年は担任をはずれて遠目から見っていますが、一緒にやった担任がさらに進化させてくれているので、それを見ているところです。

庄子：友達のいいとこさがしが結局は自分の良さを見つけるということに行き着くのかと思います。

最後に新田さん、学校現場を離れたところで、社会の中ですこやかに育っている子どもたちの話を聞かせてください。

新田：私が経営するボクシングジムには「キッズクラス」という小学1～6年生向けのクラスがあります。週1回または2回、午後5時から6時に、所属するクラスを決めて同じメンバーで練習を行っています。同じ空間には、プロ選手やサラリーマン、学生、主婦など様々な立場・年齢の方が練習を行っていて、その中でいろいろなことを学んでいきます。

27年ほど前にプロ選手を引退し、サンフラン

シスコに移住した際、当時小学校3年生だった息子が、街の柔道教室へ入門した時のことが今でも印象に残っています。そこは、老若男女、様々な立場・年齢の人たちが練習を行い、その中にはオリンピック選手も混ざっているという環境でした。子どもたちはそれらの人たちと共に過ごす中で多くのことを学び、成長していく姿が見られました。「礼に始まり、礼に終わる」という武道精神を重んじつつも、決して堅苦しい雰囲気ではなく、個性を尊重する雰囲気の中で、私の息子も言葉の通じない異国の地で自信をつけていくことができました。

「いつかボクシングジムを開くなら、こんな場所にしたい」と思って2003年にジムを開設しました。老若男女、様々な立場・年齢の人たちがいて、プロのチャンピオンも厳しい練習をしています。子どもたちの中には、入門当時はしっかりと挨拶ができない者もいます。しかし、仲間たちや強いプロボクサーらの振る舞いに接していくうちに、自然と大きな声で挨拶が出来るようになっていくのです。やがて年下の子どもに挨拶をするよう指導するほどの成長を遂げることもしばしば見られます。

キッズクラスではパンチの打ち合いは行いません。シャドーボクシングやサンドバッグ打ち、ミット打ちといったボクシングの基本的トレーニングを行います。なかには実戦にチャレンジしたい子どももおり、エアボクシングやマスボクシングという競技にチャレンジする子どももいます。

また、U-15(現JCL)という、大きめのグローブとヘッドギア(防具)を付けて、実際にパンチを打ち合う競技も15年以上前から全国大会が開催されています。

ボクシングに対する暴力的なイメージは、まだまだ否定できない部分もあるかと思いますが、打ち合いの競技ゆえに、他のスポーツよりもルールを重んじ、相手への尊敬の念を醸成させる競技だと考えています。実際、現在活躍している世界チャンピオンの井上尚弥選手もU-15の出身で、現在は「ドコモ未来フィールド」の活動を通して、未来を切り開く子どもたちの成長を応援する活動に取り組んでいます。

ボクシングであれ、違うスポーツであれ、ま

たスポーツではなく、音楽や芸術であれ、地域で老若男女、様々な立場・年齢の人たちと共に活動をすることで、子どもたちは「すこやかに育っていく」のではないのでしょうか。

オンラインゲームやeスポーツ、AIなど、テクノロジーの発展は素晴らしいですが、やはり地域の人々との触れ合いこそが、「子どもたちのすこやかな成長」にとって、大切なことであると考えます。

庄子：コーディネートやる折にいろいろ文書を読みました。学校・家庭・地域というのは私が現職の頃にも書かれていたが、今は関係機関、民間企業、NPO等、子どもの成長に関わる全ての人が、連携協働しながら子どもを育むという文言がありました。昔は、教育は学校だけと認識されていましたが、新田さんの話を聞くと民間(ジム)でも子どものすこやかな育ちに関わっています。いろいろなことを学ぶというのをもう少し聞かせてほしい。

新田：今、私は大学院生としてスポーツウエルネス学研究科に在籍しています。担当教授がスポーツ庁で、学校部活動の地域移行についてのアドバイザーをされています。私たちのような民間機関と連携することによって子どもがすこやかに育っていくことの支えとなっていくのではと思っています。



私のジムでは防犯ロードワークを行っています。強いボクサーたちが「防犯パトロール」のビブスを着て街を走り、地域の安心・安全に役に立っています。中学生以上の子どもたちも防犯パトロールというゼッケンを付けて走っています。ただボクシングをやればいいということではなく、地域の一員として学んでいくひとつの形になっているのではないかと思います。

庄子：最後に、シンポジストの話から、すこやかに育っている姿が少しずつ見えてきたのではないかと思います。

改めて、これからすこやかに育つためにどんな取組をするか聞かせてください。

谷川：皆さんの話を聞いて思うことは二つ。一つは、本当に大変なことも多いのですが、楽

しいことがいっぱいあるので、強い信念をもって決して諦めることなく、志を高くもってがんばっていきたいと思っています。

もう一つは、仲間を増やしていくことが大切だと思います。今年はコマではなくてカルタですが、子どもが乗ってこなくて、私が悩んでいたときに「絶対大丈夫」と声をかけてくれる、そういう仲間がいるとそうかなと思います。若い人たちを育てていくことが大事と思っていますし、私もそういうふうに育ててもらいました。こうやったらうまくいくよ、と一緒に考えてくれる先輩がいたから、そういう立場になって、取り組んでいきたいと思っています。

私の学校では、こういう子どもたちを育てていくために公開授業を行っています。クラスがいろいろな実践を提案し、ご意見をいただいて、子どものいいところを多方面から見てもらい、子どもたちの実践の次の手立てとしています。来ていただいて、子どもたちが育つということと一緒に考えていけたらと思います。

横田：すこやかに育つということが具体的にどういうことか考えながら他の方の発表を聞いていました。今思えることは「子ども一人ひとりが夢や希望の実現に向かって、その子らしく成長すること」と考えたら、その機会を作ったり、やる気に火をつけたり、コーチしたりといったところに力を注ぎたいということです。

その第一歩は子どもの話を丁寧に聞く。途中で切り上げてお説教にうつったりすることはやめて、よく話しを聞いてあげたいなと思っています。

原田：今回の話をいただいたときに、すこやかに育つというのは何だろうとずっと考えていました。答えは見つかっていませんが、すこやかに育つというのは、成長という言葉に置き換えると二段階に分けられるのかなと思います。一つは様々な人と関わるとか、その子に関わる環境づくりを行うことかなと感じました。

その上で二段階目は、児童生徒から受け取り、



気づいてあげることが大事なのかと思います。さらに、このような場に参加して意見を交流することが大事なのだろうと考えさせられました。

新田：私のジムではメンタルトレーニングを採用しています。もちろんトップ選手向けでも当然あるとは思いますが、実は中学生、高校生もそのトレーニング・セッションに参加しています。先ほど、いいとこさがしの話が出ましたが、メンタルトレーニングのプログラムの中にもあり、例えばポジティブシンキングということで、相手のいいところ、あるいは自分のいいところを書き出すことなどで、肯定的な考え方を常にできるようにトレーニングしていくというようなセッションです。学校現場でもこうしたことができたということですし民間でもできるということなので、さらに学校現場との連携に努めていきたいと思っています。学校は民間との壁がまあまあ高いところがあり、たまたま私が教育学部出身だということもあって連携させていただいていますが、それを突破口に、もっともっと連携していけるように努めていくようにしたいと思います。

庄子：横田さんや原田さんの事例は、子どもどうしの励ましや共感が、認め合いや子どもの自信につながって、次に進んでいくというお話。谷川さんや新田さんは学級、学校の枠を越えて、日常の共感とはまた違った場での一段大きな達成感につながっていると思います。そういうところに子どもを投げ込むのも大切なことかなと感じました。特にNPOや民間とも手を組んでともに協働してやっていきたいと思っています。

さて、このあと休憩後、フロアの皆様と一緒に子どもがすこやかに育っている様子をざくばらんに話していただきたいと思っています。

意見交換をして、特に学生さんは友松会の先輩もいるので、そこで交流するという気持ちで、参加してもらいたい。学生さんもいっぱい悩みや不安もあると思いますので、そこで出させていただいて、先輩・OB・キャリアから話をいただくといいかなと思います。

【グループディスカッションの様子】



グループディスカッション参加者からのひと言

◎ 現役の学生さんの声を聞いて、若い人たちと交流をもつことの大切さを感じました。まっすぐな思いをもっていて素敵だと思いました。現役の教員として、学生さんの悩みに少しでも応えることができたなら、今日は、この会に参加してよかったと思いました。教師は大変なことも多いけれど、やりがいのある仕事です。仲間と励まし合い、これからもせっかくだからこのような会をいただけたらと思いました。

◎ 学校というところで、生きる力をつけ、学び合うことができる場であるので、ますますやりがいをもって取り組んでいきたいと感じました。いろいろな立場の方とこうして意見交換をすることで、今の子どもたちの未来を考えて進んでいけると感じました。学生の方が実習を通して協働的な学びが大切だと感じていて頼もしく感じました。自分の今やっていることを再確認できる貴重な機会となりました。大変有意義な場で初めて参加しましたが、勇気も湧きとても良かったです。他の方にも来年勧めたいです。

庄子：最後にこの会に参加しての感想等を、シンポジストの方、軍司副学部長さんからいただきます。

横田：チャイムが鳴った時「もう終わりなの、もう少しやりたい」と言ってもらえるような授業を年に数回は実践したい。子どもが成長して大人になった時にも夢と希望をもってもらえるような身近な存在でありたいと思いました。

谷川：実践をお話しさせていただきただけでなく、グループの中でお話を聞かせてもらって貴重な時間をいただいたと思っています。子どもたちに育ててもらっている私が学び続けなければいけないと改めて感じました。私自身が生き生きと授業を行うこと、子どもたちへの声かけや対話を大事にしたいと思いました。

新田：教育というのは人類の根幹であると考えます。人を育てる、人を育む。この教育という人類の一大事業を担う一人として、地域で頑張っていきたいと思っています。

原田：話の場の大切さを実感しました。印象に残ったことは「自分が楽しんでいないと子

どもを楽しませることができない」ということです。「楽しむ」ということを考えていながら、学校ボランティアの実践に役立てていきたいと思いました。

軍司副学部長

シンポジストの皆様が様々なお立場で率直に経験を紹介してくださったおかげで、ディスカッションでは活発な交流ができていたと感じました。学生の研修を担当する中で、人生の先輩方に質問したり、意見を述べたりする経験の乏しさを感じていたところです。今回のグループ討議を拝見し、職場としての学校でもこうして立場の違いを超えて意見を自由に交換できるという職場の雰囲気を垣間見ることができたのではないかと思います。

今後こうした場が増えていくことを期待しています。本当に豊かな時間をありがとうございました。

閉会の言葉(藤馬 享 副会長)

【当日流されたスライドショー】

